

卷第十一 恋歌一……………一四一

卷第十二 恋歌二……………一四二

卷第十三 恋歌三……………一四三

卷第十四 恋歌四……………一四四

卷第十五 恋歌五……………一四七

卷第十六 雜歌上……………一四九

卷第十七 雜歌中……………一五〇

卷第十八 雜歌下……………一五四

卷第十九 神祇歌……………一五五

卷第二十 釈教歌……………一六四

付録

補注……………一五三

作者略伝……………一五五

解題……………一五七

初句索引……………一五七

新古今和歌集序

群徳之祖一抄に「前漢書蕭仲舒伝云、天者
 群物之祖也といへる語意を用ひられしに
 や一云々。
 玄象天成一天の色と形、天の形成の自然に
 まずなつたことを指す。天地開闢説に當る。
 五際六情一五際とは、君臣、父子、兄弟、
 夫婦、朋友の關係、六情とは、喜・怒・哀
 ・楽・愛・惡をいう。
 素鶴地静一素鶴鳴尊が楠稻田姫とすがの宮
 に宮殿をいとなまれたこと。また八雲たつ
 の和歌を云々している。
 長短雖異一長歌、短歌の歌体の差。
 理世撫民云々一世を治め、民を愛する大綱。
 崑嶺之玉云々一崑崙山の玉、鄧林は列子湯
 問篇中の故事による広大な森林。
 表希夷一底本「表」の字を欠く。烏丸本に
 より補う。希夷は老子に使用の語、見ず聴
 かざるところにも歌あるを表明するため。
 玄圃一崑崙山上の丘の名称。
 瓊珂一瓊、玉に次ぐ石。「玉のみぎり」の
 意、両句、後鳥羽院の仙洞をさす。
 犀象之牙角一翡翠之羽毛一優れたものの意。

新古今和歌集序

夫和哥者、群徳之祖、百福之宗也。玄象天成、五際六情之義未レ著、素
 鶴地静、三十一字之詠甫興。爾来源流寔繁、長短雖レ異、或抒ニ下情、
 而達レ聞、或宣ニ上徳、而致レ化、或属ニ遊宴、而書レ懷、或採ニ艷色、而寄
 言。誠是理世撫民之鴻徽、賞心樂事之龜鑑者也。是以聖代明時、集
 而録レ之、各窮ニ精微。何以漏脱。然猶崑嶺之玉、採レ之有レ余、鄧林
 之材、伐レ之無レ尽。物既如此、歌亦宜然。仍詔ニ參議右衛門督源朝
 臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近衛權中將藤原朝臣定家、前上総介
 藤原朝臣家隆、左近衛権少將藤原朝臣雅経等、不レ扞ニ貴賤高下、令
 撫ニ錦句玉章。神明之詞、仏陀之作、為レ表ニ希夷一雜而同。隸。始ニ於
 曩昔、迄ニ于當時、彼此總ニ編、各俾ニ呈進。每レ至ニ玄圃花芳之朝、瓊
 珂風涼之夕、斟ニ難波津之遺流、尋ニ浅香山芳躑、或吟或詠、拔ニ犀象
 之牙角、無レ党無レ偏、採ニ翡翠之羽毛、裁成、而得ニ二千首、類聚、而為ニ

新古今和歌集序

- 1 和歌の起源
* 人のしわざ―底本「人のわざ」。烏丸本により訂す。
- * このは―底本「こは」。烏丸本により訂す。
- 稲田姫―素盞鳴尊の妃。
素盞のさと―真名序にも出る。
- * つたはれりける―底本「つたはりける」。烏丸本により訂す。
- 2 和歌の徳
- 代々の御門云々―世々の勅撰集のこと。
- 3 撰集のこと。
- ことばの花…もれたるくさ云々―秀歌の撰はれて、あますことがないの意。
- いせのうみ云々―伊勢の海清きなぎさの塩かひになのりそやつまむ貝や拾はむ玉やひろはむ(催馬楽)
- いづみのそま―宮木ひくいづみの袖にたつ民のやむ時もなく恋ひわたるかも(万葉一六)

やまと詞は、むかし、あめつちひらけはじめて、人のしわざ¹いまださだまらざりしとき、葦原の中国^{なかくに}のことのはとして、稲田姫、素鷲のさとよりぞつたはれりける。しかありしよりこのかた、そのみちさかりにおこり、そのながれいまにたゆる事なくして、色にふけり、心をはぶるなかだちとし、世ををさめ、たみをやはらぐるみちとせり。かゝりければ、代々の御門も是をすて給はず、えらびおかれたる集ども、家々のもてあそびものとして、ことばの花、のこれるこのもとかたく、おもひの露、もれたるくさがくれもあるべからず。しかはあれども、いせのうみさよきなぎさのたまは、ひろふともつくる事なく、いづみのそましげきみや木は、ひくともたゆべからず。ものみなかくのごとし。哥のみちまたおなじかるべし。これによりて、右衛門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中将藤原朝臣定家、前上総介藤原朝臣

4 今度の撰集の根本方針。

- 5 撰者の原案に上皇の御精選のこと。
難波津―「なにはつにさくやこの花冬ごもり今をはるべとさくやこの花」(古今序)
あさかの山―「浅香山かげさへみゆる山の井のあさき心をわが思はなくに」(万葉集一六)
- この二首は古今集の序に「歌の父母」と云われている。
- 6 古歌の取扱い方針
七代の集―古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載。

- 7 この集の構成の大綱について、各部の代表歌をもつてつづる。
はるがすみ―春上、大伴家持「ゆかん人こん人しのべはるがすみたつたの山のはつざくらばな」。
- 夏はつまこひ―夏、読人不知「おのがつまこひつゝなくやさみやみ神なびやまの山郭公」。
- 秋はかせにちる―秋下、人丸「あすかがはもみぢばながるかづらきのやまの秋風ふきぞしぬらし」。
- 冬はしるたへの―冬、赤人「たこのうらにうちいでみれば白妙のふじのたかねに雪はふりついで」。

家隆、左近少将藤原朝臣雅経等におほせて、むかしいま時をわかたず、たかきいやしき、人をきはらず、めにみえぬ神仏のこの葉も、うばたまのゆめにつたへたることまで、ひろくもとめ、あまねくあつめしむ。各々えらびたてまつれる所、なつひきのいとこのひとすぢならず。ゆふべの雲のおもひさだめがたきゆゑに、みどりのそら、はなかうばしきあした、たまのみぎり、かせすゞしきゆふべ、難波津のながれをくみて、すみにごれるをさだめ、あさかの山のあとをたづねて、ふかきあさきをわかつてり。万葉集にいれる哥は、これをのぞかず、古今よりこのかた、七代集にいれる哥をば、これをのすることなし。ただしことばのそのにあそび、ふでの海をくみて、そらとぶとりのあみをもれ、水にすむ魚のつりをのがれたるたぐひは、むかしなきにあらざれば、いまも又しらざる所なり。すべてあつめたる哥、ふたちゝはたまき、なづけて新古今和歌集といふ。はるがすみたつた山に、はつ花をしのぶより、夏はつまこひする神なびのほとゝぎす、秋はかせにちるかづらきのみぢ、冬はしるたへのふじのたかねに、雪つもるとしのくれまで、みな、をりにふれたるなさけなるべし。しかのみなら